

## 研究ノート

# 高齢者の地域人材活用としての学校支援ボランティア における活動と認知症予防の関連性について

高尾兼利・赤星まゆみ・櫻井琴音・古川勝也・高石次郎・松井克行・田中麻里  
渡邊真理子・櫻井京子・松本大輔・山田修司・岩根 浩・久野隆裕・草場聡宏  
飯盛啓生・中村理美・西村侑香里

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(令和2年1月21日受理)

## Relationship Between the Perceptions of the Activities of Older School Support Volunteers as a Resource in the Community and Prevention of Dementia

Kanetoshi TAKAO, Mayumi AKAHOSHI, Kotone SAKURAI, Katsuya FURUKAWA,  
Jiro TAKAISHI, Katsuyuki MATSUI, Mari TANAKA, Mariko WATANABE, Kyoko SAKURAI,  
Daisuke MATSUMOTO, Syuuji YAMADA, Hiroshi IWANE, Takahiro HISANO, Tokihiro KUSABA,  
Hiroo ISAGAI, Rimi NAKAMURA, Yukari NISHIMURA

(Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted January 21, 2020)

### Abstract

Several studies have showed that participating in volunteer activities has a positive impact on the mental and physical health of older people. Therefore, in the future, it will likely be necessary to clarify the relationship between the perceptions of older volunteers and their effects on the prevention of dementia. Herein, we aim to provide data for examining this relationship.

The following methodology was used to achieve this goal:

- (1) A questionnaire survey was conducted in kindergartens, elementary schools, and junior high schools in the city of Saga to clarify the ways in which older people are put to use in the community and as school support volunteers. From the 94 that were asked to participate, 63 schools and kindergartens responded.
- (2) After assessing the results of this survey, another questionnaire survey was conducted to determine how school support volunteers' perceptions were structured in elementary schools in Saga: 148 valid responses were received.  
The results were as follows:
  - (1) The actual conditions of school support volunteers  
Respondents at schools and kindergartens reported that volunteering provided older people with a sense of purpose in life.
  - (2) Structures in the perceptions of school support volunteers
    - ① Their perceptions broadly comprised the following two types: a sense of being useful and connected and a feeling of fulfillment.  
Furthermore, there was a sense of enjoyment, which was independent of these two types.
    - ② Differences in attributes
      - ・ Gender differences  
An outward-directed critical perception was observed in men, whereas an inward-directed critical perception was observed in women.
      - ・ Differences in opportunities  
The group of volunteers who participated on their own motivation had a greater perception of being useful and connected than those who participated on others' recommendation.

## 1. はじめに

認知症予防の研究において牧迫<sup>1)</sup>(2017)は「近年では認知症の予防が期待できる行動や手段を介入に用いることで、認知症予防に効果がもたらされるのかの検証が試みられている」とし、認知症予防の研究が介入研究とその検証に至っていることを示唆している。その中で「現状においては、認知症を予防できる、もしくは発症を明らかに遅延できるとした明確な方法は不明であるが、その可能性がある介入手段として身体活動や知的活動を含めた日常での積極的な活動を促進することが期待される(牧迫<sup>1)</sup>, 2017)」と述べ、身体活動及び知的活動の重要性をあげている。また一宮<sup>2)</sup>(2008)は「認知症予防には日常生活の中でコミュニケーションを充実させ脳の機能を活性化させる」、さらに高齢者が生活に目的を持った社会生活への参加(清原<sup>3)</sup>, 2016)の重要性も指摘されている。

この様な指摘からは認知症予防には食生活や運動といった日常生活習慣の改善のみならず、知的活動やコミュニケーションまたは社会生活への参加といった“生きがい”の様相も重要であることが理解できる。つまり高齢者の地域社会の中への参加を通じた“生きがい”づくりの重要性が考えられる。特にその中でコミュニケーションまたは身体的・知的活動を伴う自己の充実感を味わうことのできる“生きがい”づくりの企画、実施、検証といった介入研究は今後重要な認知症予防の視点を提示できると考えられる。

一方平成27年に文部科学省<sup>4)</sup>から出された「これからの時代における学校と地域との連携・協働をいっそう推進するための方策(提言)」の中で、「学校は、地域から支援を得ることによって子どもの生きる力、学力向上など学校課題の解決に貢献する」と述べられ、文部行政において地域と学校の協働による教育効果を前提に今後の推進を図ろうとしている。学校現場ではこれまでもゲストティーチャー(地域人材の活用)、学校支援ボランティア等として、読み聞かせや、伝承遊び、地域の文化の伝達という学校内の授業や活動場面だけでなく、環境整備や登下校の交通指導等において地域人材を活用しながら地域と連携を図っている。

今後、「新しい公共」(松田<sup>5)</sup>, 2016)を具現化する施策としての、学校と地域の連携を目指した地域参画型の新しい学校の形はより進められていくこと

が予想される。こうした新しい形の学校は、学校を基盤とした地域創生または地域の活性化を意味すると捉えることが重要であると考えられる。このことは「学校では単なる地域の人々をゲストとして話を聞くだけでなく、地元での生産活動や地域活動を体験的に学ぶ必要がある。地域はアクティブラーニングや課題解決学習の場である。そのためには地域からの働きかけが必要である。プログラムを地域が学校に提案して行く必要がある。地域創生の視点からも学校と地域の連携・協働は更なる充実が必要(文部科学省<sup>4)</sup>, 2015)」, 「特に中高では生徒が地域活動を支援する事例も多く、地域住民に好ましい影響を与えている。同時にそれは、地域にとっても地域課題に向き合い行動することになるため、住民の自治能力の向上に寄与する(文部科学省<sup>4)</sup>, 2015)」との指摘を重視したい。つまり学校における地域支援ボランティアは学齢期の児童、生徒のみならず地域住民のウェルビーイング追求をも含んだ概念であり、学校を多世代が集まり地域課題を解決していくコミュニティとして捉えていくことが肝要である。

こうした学校の捉え方からは、例えば地域人材の活用及び学校支援ボランティアとして高齢者を活用することは、児童・生徒の学習の推進、学校業務の軽減のみならず、高齢者にとっても重要な地域社会への参加を通じたコミュニケーションまたは身体的・知的活動を伴う自己の充実感を味わうことのできる“生きがい”づくりの場であると考えられる。つまり、学校と地域の協働という視点に立てば、高齢者にとって学校は自らの経験や知識をコミュニケーションを通して伝え、多世代と交流することのできる“生きがい”の場であるといえ、また学校がこうした場になることは学校が地域課題解決のコミュニティとして機能することを意味する、といういわばWIN-WINの関係を構築できるといえる。

しかし、現在、地域人材の活用及び学校支援ボランティアに関する研究は、その学校側の効果や成果の研究が多く、そこに参画している地域人材の充実感や満足感及び地域課題の解決に役立っているという視点での調査研究は多くない。そこで本研究では高齢者にとって学校を自らの経験や知識をコミュニケーションを通して伝え、多世代と交流することのできる“生きがい”の場であると捉え、地域人材の活用及び学校支援ボランティアとして関わることで認知症予防につながるという仮説に立って研究を進めていくこととする。

今回は学校支援ボランティアが認知症予防に寄与するという仮説の検証の際の介入研究に資するための調査研究を行う。これまでの研究はボランティア活動の有無が高齢者の心身の健康に及ぼす効果についてであった。今回はボランティア実践者の意識に注目する。ボランティア活動が高齢者の心身に及ぼす肯定的影響を踏まえた上で、ボランティア活動実践者の意識と認知症予防効果の関連を明らかにしていくことが今後求められると思われる。その検証のための資料を提供することが今回の研究の目的となる。

この目的に対して、具体的には以下の2点を明らかにしたい。

- (1) 佐賀市内の幼稚園・小学校・中学校全校に高齢者の地域人材の活用及び学校支援ボランティアの実態調査を行い、どんな内容・活動でどのくらいの頻度で高齢者が地域人材の活用及び学校支援ボランティアに参画しているか、さらにボランティア活動の実践がボランティア活動者にどのようなものをもたらしていると学校関係者が理解しているかを明らかにする（実態調査）。
- (2) 実態調査の結果から質問紙を作成し、現在地域人材の活用及び学校支援ボランティアに参画している高齢者に対して質問紙調査を行い、学校支援ボランティア実践者の意識構造を明らかにする（意識調査）。

## 1. 高齢者の地域人材の活用及び学校支援ボランティアの実態について

### 1) 調査の方法

平成29年12月から翌年1月末にかけて「高齢者の地域人材の活用及び園・学校支援ボランティアの実態調査」（質問紙調査）を実施した。対象は佐賀市内の、幼稚園・認定こども園（40園）、佐賀市立小学校（35校）、佐賀市立中学校（18校）である。回答者は各学校園のボランティア担当等教員である。全体で94園・校の中の63園・校、67%の回答率である。調査内容は、現在の高齢者のボランティア状況、活動内容、ボランティアの有用性、及びボランティアが高齢者自身の生きがいになっているかどうか、の12項目で、自由記述での回答を求めた。

### 2) 結果及び考察

集計分析の結果は以下のとおりである。現在高齢

者をボランティアとして活用している割合は幼稚園・認定こども園では5園（19%）、小学校では26校（93%）、中学校では8校（89%）となった。小学校中学校の割合が高い結果となった。また65歳以上のボランティア人数は幼稚園・認定こども園では28名、小学校では537名、中学校では31名となり、総数で延べ596名であった。ボランティアの内容は園・学校の行事や課外活動、授業の体験活動と多岐にわたり、形態も短期、長期と様々であった。

幼稚園・認定こども園では69%、小学校では85%、中学校では67%、全体で75%の園・学校において、「ボランティアが高齢者自身の生きがいになっているかどうか」という質問項目で、「そう思う」と答えた。さらに「内容によってはそう思う」を加えると、92%を占める割合となった。学校・園がボランティア活動は高齢者自身の生きがいにつながっていると捉えている、結果となった。

その理由については「有用性」「社会的繋り」「役割感」「存在感」「満足感」といった、社会に貢献することで自分の存在や自分の生きるエネルギーにつながるなどの記述が多かった。また子どもと触れ合うことで「喜び」や「楽しさ」を感じているのではないかと、という好感情の影響があると答えた記述も少なくなかった。その他に「高齢者同士のつながりもできる」、「高齢者自身が学ぶことで活性化している」等の記述も見られた。

さらに、地域人材活用及び学校支援ボランティアにおいて先進的な取り組みを行っている自治体を視察訪問した。「岡山市立岡輝校区におけるシニアスクールの取り組み」と「下関市立垢田小学校のコミュニティー・スクールと認知症カフェ（オレンジカフェ）の取り組み」である。

前者は高齢者が児童生徒と共に学び合う取り組みである。視察者からの報告に「高齢者の存在が学校の教育改善につながっている喜びと有用感」が指摘されている。後者は、認知症者に対して学校を舞台に子どもとの交流をまちづくり協議会が提供している取り組みである。視察者からの報告に「子どもたちのために自身も役に立ちたいとの認知症高齢者の思い、生きがい」が指摘されている。両者ともに、質問紙調査で明らかになった、学校の場での子どもたちとの交流が高齢者自らの役立ち感、有用感、生きがいを生んでいることがうかがえる。ボランティア活動を実践している高齢者に対する今後の調査に示唆を与える知見といえる。

## 2. 学校支援ボランティア実践者の意識構造について

### 1) 調査の方法

令和元年5月21日から6月21日にかけて佐賀市内の全小学校に841通の質問紙調査を配布し、学校関係者を通じて学校支援ボランティア実践者に届けるようにした。回答締め切りを同年8月31日とした。有効回答数は151であった。

質問紙の内容については以下の通りである。教員対象の調査で明らかになった5軸、すなわちボランティア実践者の「有用性」「社会的つながり」「役割感」「存在感」「満足感」の各々に相当する質問事項を3項目考案し、全体で15項目の質問とした。

項目作成の手続は次の通りである。教科教育学を専門とする研究者2名が質問項目を一次的に考案し、心理学を専門とする研究者がこの一次案を検討した。この後3者に於いて、最終的に合意した項目内容を調査事項とした。これに学校支援ボランティア活動についての自由記述欄を加えた。

なお、本調査が「認知症予防」との関連の調査であることを明示する字句を、調査用紙に記載することを避けた。このことによる回答の偏りを防ぐためである。この質問紙の具体は末尾に掲載している。

### 2) 結果及び考察

#### (1) 学校支援ボランティア実践者の意識構成

学校支援ボランティア実践者の意識構成を探るために151名分の有効回答から一部項目への未回答者を除いた139名分の回答をもとに因子分析を行った。

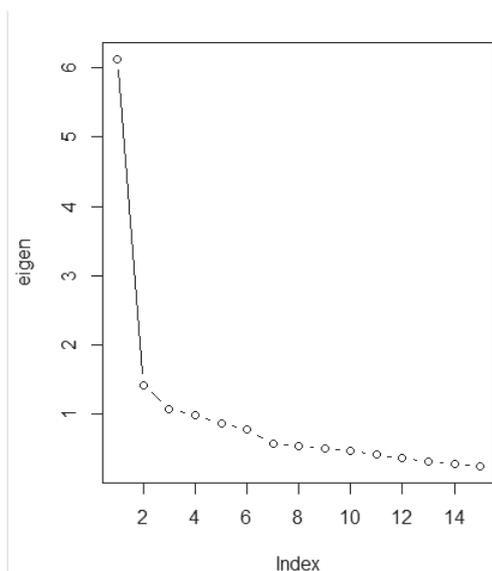


図1 固有値のスクリープロット

最初に因子数を決定するために、固有値を求めた。固有値のスクリープロットを図1に示す。

図1をもとに因子数を2として、因子分析を行うことにする。プロマックス回転後の因子分析の結果を表1に示す。

表1 因子分析の結果

項目番号	因子1	因子2
Q 8	0.796	-0.030
Q 3	0.676	-0.045
Q13	0.639	0.104
Q 9	0.639	0.046
Q 6	0.538	-0.095
Q 1	0.527	0.048
Q 5	0.525	0.315
Q 2	-0.065	0.776
Q12	0.198	0.656
Q 4	0.169	0.613
Q10	0.262	-0.611
Q15	0.220	0.548
Q14	0.211	0.507
Q 7	0.207	0.386
Q11	0.264	0.108

因子間相関 0.647

この結果より学校支援ボランティア実践者の意識は2種の群から構成されると考えられた。

一つの群は質問事項8. 3. 13. 9. 6. 1. 5. から成る群である。これを「役立ち感・つながり感」と名付けることとする。具体的質問事項は以下の通りである。

8. 学校のボランティア活動を行うことで自分が必要とされていると思いますか？
  3. 学校のボランティア活動の時に自分の知識や技術が役に立っていると思いますか？
  13. 学校で児童と関わる中で自分の知識を役立ててもらいたいと思いますか？
  9. 学校でのボランティア活動を通じて児童に教えたいことや伝えたいことがありますか？
  6. 学校のボランティア活動を行うことで社会とのつながりを感じますか？
  1. 学校のボランティア活動を行うことで社会の役になっていると感じますか？
  5. 学校でのボランティア活動で児童に教えることはやりがいになっていますか？
- もう一つの群は質問事項2. 12. 4. 10. 15. 14. 7.

から成る群である。こちらは「充実感」と名付けることとする。具体的質問事項は以下の通りである。

2. 学校で児童と関わるのは楽しいですか？
12. 学校でのボランティア活動を今後も続けたいと思いますか？
4. 学校でボランティア活動を行うことは自分のためになっていると感じていますか？
10. 学校でボランティア活動を行うことに負担感がありますか？
15. 学校でボランティア活動を行うことが生活に充実感をもたらしますか？
14. 学校でのボランティア活動を通して、児童のために自分をもっと何か頑張ろうと思ったことはありましたか？
7. 学校でのボランティア活動を他の人にも勧めますか？

ボランティア実践者集団の中で「役立ち感」と「つながり感」が近縁のことと認識されていることに注目したい。すなわち、子どもたちの成長や安心安全の確保に自分たちのボランティア活動が役に立っていると意識していることと、自分が子どもたちや学校関係者を中心として地域の人とつながっていると意識が同じような意味を持っていることと意識されていることを教えている。

ボランティアが自己に充実をもたらす、自分のためになっていると感じ、そのことがあってボランティアを続けたい、かつ他の人に勧めたい、これらのことが同類の意味として受け止められている。こうした意識は高齢者の心身の活性化に寄与し、さらにこうした意識と認知症予防の機能との関連を指摘できるかもしれない。

また、「11. 学校でのボランティア活動を始めてから、他のボランティアとつながりが出来ましたか？」の項目も本来は最初の群に含まれると考えられるが、分析の結果、どちらの群に対しても負荷量は小さかった。

逆に、「やりがい」について直接尋ねた「5. 学校でのボランティア活動で児童に教えることはやりがいになっていますか？」の回答が因子1の群に含まれるものの、因子2に対しても関係し、いわば、因子1「役立ち感」と因子2「充実感」の両方に位置していることも示唆的である。すなわち、「役に立っている」と感じることに「充実している」と意識すること、その中間に「やりがい」が位置づけられる。両者が相まって「やりがい」をもたらすと考

えることができる。

因子2に含まれる項目の中でも、2.の「学校で児童と関わるのは楽しいですか？」の項目は、「充実感」の中でも、特徴的であり、私たちはこの項目に注目したい。他の質問事項は行為や思い、願い、認識を尋ねている。「楽しいですか」は、感情体験について問うている。質問自体の質が他の事項と異なっている。この違いが一定程度反映された結果と考えられる。

さて「楽しい」には、色々な意味が内包されている。「①満足で愉快的気分である。②豊かである。富んでいる。」(2018, 広辞苑第7版<sup>6)</sup>)が日本語の意味である。また、漢字からはどのような「楽しい」の意味が導き出されるであろうか。楽しいを意味する漢字は楽・予・怡・娛・嬉がある。「楽は音楽を奏する意からたのしむになった。苦の反、心の苦しみや心配のないこと」、「予は心がゆったりして楽しむこと」「怡はやわらぎ楽しむこと」「娛は気分をゆったりして楽しむこと」「嬉は遊び楽しむこと」(1993, 漢和中辞典第231版<sup>7)</sup>)が漢字の教える意味である。一方英語圏では「楽しい」はどうであろうか。「Absorbing 夢中にさせる」「Amusing 面白い、楽しい(人を楽しませる)」「滑稽な」という意味での「面白い」という意味もあり「Attractive 人を惹きつける」「Delightful 喜びを与える、人を愉快にさせる」「Enjoyable 愉快、楽しめる(本や休暇など)」「Fascinating 魅力的(attractive)、夢中にさせる」「Fun 楽しみ、面白い事物、愉快で面白い、気楽で面白い」「Funny 滑稽で面白い」「Gripping 心を強くとらえる、面白い、惹きつける(本や話など)」「Interesting 関心を引き起こす」「Intriguing 好奇心をそそる」「Pleasant 楽しい、愉快的、心地よい」「Stimulating 刺激となる」の表現が見られる。英語圏の場合、日本語の「おもしろい」の意味を含むものと理解できる。「①気持ち晴れるようだ。愉快である。楽しい。②心をひかれるさまである。興味がある。また、趣向がこらされている。③一風変わっている。滑稽だ。おかしい。④思うとおりで好ましい。」、これらが日本語の「おもしろい」の意味である。英語圏の「楽しい」は日本語の「楽しい」と「おもしろい」を合わせた意味以上のものを含むと考えられる。さて、これを「学校で児童と関わることは楽しいですか？」の文脈で考えると、どのような意味が含まれていると考えた方がよいのだろうか。私たちが注目したいのは、英語圏の次の意味で

ある。「Delightful 喜びを与える, 人を愉快にさせる」「Gripping 心を強くとらえる, 面白い, 惹きつける (本や話など)」「Interesting 関心を引き起こす」「Intriguing 好奇心をそそる」「Stimulating 刺激となる」の5種の表現である。高齢者のボランティア実践者とその対象となる児童との間で互いに「喜びを与え」, 実践活動が「心を強くとらえる」ものがあり, 「関心を引き起こし」「好奇心をそそる」, さらに活動が「刺激」となって, さらに実践が豊かになっていく。こうしたことで「学校で児童と関わることは楽しい」ことになることを期待したい。

今回の調査では学校ボランティア実践者に自由記述も求めている。自由記述は「調査に対する意見」「行政に対する意見」「学校に対する意見」「教育に対する意見・戸惑い」「ボランティア活動の今後に対する意見」「役立ち感・つながり感やその類同の感覚が表現された記述」「充実感やその類同の感覚が表現された記述」に分類した。ここでは私たちが今回の件「役立ち感・つながり感」と「充実感」, 私たちが先に期待した「楽しい」が包含する意味を具体的に表現している代表的な記述を紹介しておく。

「役立ち感・つながり感」を表した文章は次の通りである。「クラブ活動でお花クラブをさせて頂いていますが, 子ども達が良い方に変わっていくのを感じています。それがとっても嬉しく思います。(70代女性)」「子ども達の元気な声と笑顔が励みとなります。またボランティア活動を通していろんな方と知り合えるのが楽しみです。(70代男性)」「学校行事で学校に行くと子どもさんたちが元気いっぱいでごんには, ありがとうございます。ととてもよく挨拶が出来る子どもさんたちです。学校の下校時通り道田んぼや畑にいて“お帰り, もう少しだから頑張っってね”と一言声をかけてやるようにしている。子どもさんがかわいいですね。(70代女性)」

「充実感」を表した文章は次の通りである。「今私たちの学校でのボランティアは支援しているつもりが, 子どもたちに色々教えられることも多く, 元気をもらっていると実感している。(70代女性)」「子ども達とのふれあいをとお互いの心が通じ合い, ひいては地域の活性化につながると思います。子ども達の健やかな成長を願ってボランティア活動をしています。(70代女性)」「ボランティア活動の中に自分自身を見直す事ができ, 大変楽しく活動をさせて頂いています。子ども達との関わりが楽しみになっています。(70代男性)」

## (2) 属性 (性差, 参加契機) と参加意識の関係

### ① 性差について

各項目に対する回答をそう思う: 1, どちらかと言えばそう思う: 2, あまりそう思わない: 3, そう思わない: 4, とし得点化し, 男女別 (男89名, 女62名) に, 各々の平均を求めた。性差に関して, 有意差が認められた項目について記述する。

男性の方が女性よりも肯定的に感じていることが示された項目が1項目あった。先に「役立ち感・つながり感」に含まれるとした項目の中の「1. 学校のボランティア活動を行うことで社会の役になっていると感じますか? ( $t=1.778, p<.05$ )」である。

一方, 女性の方が男性よりも肯定的に感じていることが示された項目が3項目あった。先に「充実感」に含まれるとした「2. 学校で児童と関わるのは楽しいですか? ( $t=3.138, p<.01$ )」「10. 学校でボランティア活動を行うことに負担感がありますか? ( $t=2.763, p<.01$ )」「4. 学校でボランティア活動を行うことは自分のためになっていると感じますか? ( $t=2.193, p<.05$ )」である。

この違いを男性は外向きの意識化, 女性は内向きの意識化と考えることとする。

### ② 参加契機について

性差と同様の得点化し, 参加契機の「自分から参加した」と「これ以外の参加契機」(子や孫などの親族がいた, 声をかけてもらった, その他)を比較した。「自分から参加した」が46名であり, これ以外の参加契機が107名であった。参加契機に関して, 有意差が認められた項目について記述する

「自分から参加した」群が「これ以外の参加契機」群より有意に肯定的に感じている項目は, 7項目であった。先に「役立ち感・つながり感」に含まれるとした項目の中の「5. 学校でのボランティア活動で児童に教えることはやりがいに感じますか? ( $t=2.156, p<.05$ )」「9. 学校でのボランティア活動を通じて児童に教えることや伝えたいことがありますか? ( $t=2.060, p<.05$ )」「13. 学校で児童と関わる中で自分の知識を役立ててもらいたいと思いますか? ( $t=1.957, p<.05$ )」の3項目であった。これらに加えて, 「充実感」に含まれる「2. 学校で児童と関わるのは楽しいですか? ( $t=1.676, p<.05$ )」「4. 学校でボランティア活動を行うことは自分のためになっていると感じますか? ( $t=1.866, p<.05$ )」「12. 学校でのボランティア活動を今後も続けたいと思いますか? ( $t=2.911, p$

＜.01)」「14. 学校でのボランティア活動を通して、児童のために自分がかもって何か頑張ろうと思ったことはありましたか？ (t=2.939, p<.01)」の4項目が含まれた。

「自分から参加した」群は、自らのボランティア活動に対して「役立ち感」「つながり感」をより強く意識していることが分かる。従来のボランティア活動の参加に関する課題として「参加の意思を持ちながら活動できない」(澤岡<sup>8)</sup>, 2017)ことがあげられている。こうした事態に関係する要因として「役立ち感」「つながり感」を指摘しておきたい。すなわち、参加の意思を持ち、これに「役立ち感」「つながり感」を想像できることが、現実の参加に影響する可能性があることを指摘しておきたい。

## (2) 学校支援ボランティア実践者の意識構成と認知症予防

認知症予防と高齢者のボランティア活動の関連はこれまでも指摘されてきている(三ツ石ら<sup>9)</sup>, 2013, 島貫ら<sup>10)</sup>, 2007。)さらに、学校支援ボランティアに限らず広く高齢者のボランティア活動が心身の健康に及ぼす効果の詳細はどうであろうか。高齢者のボランティア活動が高齢者の健康向上に影響を与えることについては、早くから注目されている。こうした研究のレビュー(藤原ら<sup>11)</sup>, 2005)によると、「ボランティア活動は生活機能障害を抑制する」、「ボランティア活動はすべてのwell-being指標を高める効果がある」、「ボランティアを長く継続している高齢者ほど抑うつが抑制される」など、ボランティア活動が様々に高齢者の健康向上に寄与していることが検証されている。同じく糸井ら<sup>12)</sup>(2012)もボランティア活動が「心理的well-beingの向上」「身体的well-beingの向上」「社会的well-being」をもたらすことを指摘している。特にボランティア活動に世代間交流体験が含まれた場合「若者と交わる活動の方が高齢者間のみのボランティアよりも生活満足度が高いことと関連がある」(藤原ら<sup>11)</sup>, 2005)ことが明らかになっている。さらに、「りぷりんと」(絵本読み聞かせ世代間交流プログラム)への参加・活動が加齢に伴う海馬萎縮に及ぼす影響を緩和しているとの結果が得られている(Sakurai R et al<sup>13)</sup>, 2017)。このように高齢者のボランティア活動、特に世代間交流を含む活動が高齢者の健康向上に寄与していくことが検証されている。ただしこれらは活動の有無と高齢者の心身の健康

との関連を検証したものである。活動実践者の意識との関連には触れられていない。

さて、ボランティアに参加する高齢者の意識はさまざまである。「役立ち感」「つながり感」「充実感」が私たちの研究で浮かび上がった参加活動意識である。この意識の在り様の違いはボランティア活動がその実践者に与える影響の違いに関係してくると思われる。この意識はボランティア活動の内容、ボランティア活動の位置づけ、ボランティア活動の対象の特性、ボランティア活動に対する社会の評価等によって左右されるにちがいない。他方では、ボランティア活動の実践者が有する特性によっても、この意識は異なると考えられる。

いずれにしても、学校ボランティア活動と認知症予防との関連を考究する上で、ボランティア活動実践者の参加活動意識を明らかにし、この意識と高齢者の心身の健康の関連を明らかにすることが必要と思われる。現在の所、これについての検証は見当たらない。

一方、ボランティア支援対象の学校の関係者は、ボランティア実践者が「生きがい」等の肯定的意識をもってボランティアに臨んでいるとの認識である。この認識は学校の雰囲気にもどのような影響を与えるのであろうか。児童生徒にはどうであろうか。私たちは地域参画型の新しい学校に注目していく。学校が高齢者ボランティアの活動から特に実践者の実践意識から学び取ることはないであろうか。私たちが先に注目した「楽しい」を時に実感しながら子どもたちと関わるのが、子どもたちに与える影響、さらに学校地域に与える影響について考えていきたい。

本研究が高齢者のボランティア活動参加への意識と高齢者の心身の健康への影響、特に認知症予防との関連、さらにこれが学校教育に与える影響の研究を進める場合の有意義な資料となることを願っている。

## ＜資料＞ 質問紙について

ここでは、質問紙で取り上げた事項のみを記述する。実際の質問紙はこの事項をA3規格で2枚に記述したものである。

タイトルは「高齢者の地域人材の活用及び学校支援ボランティアの実態調査」とした。

1. フェイスシートは以下の事項を尋ねた。

- 1) 年齢：①60歳以下，②61歳から65歳，③66歳から70歳，④71歳以上
  - 2) 性別について①男性，②女性
  - 3) 職業：①学校関係者，②公務員，③自営業(農業漁業を含む)，④会社員，⑤その他( )
  - 4) 学校ボランティアを始めたきっかけ：①親族が学校にいた，②ボランティア関係者から声をかけてもらった，③自分から申し込んだ，④その他( )
  - 5) 現在行っている学校ボランティア先：(複数回答可) ①幼稚園・保育園等，②小学校，③中学校，④高等学校
2. ボランティア活動についての意識については，「①そう思う②どちらかと言えばそう思う③あまりそう思わない④そう思わない」のいずれかを以下の質問項目ごとに答えを求めた。
- 1) 学校のボランティア活動を行うことで社会の役になっていると感じますか？
  - 2) 学校で児童と関わるのは楽しいですか？
  - 3) 学校のボランティア活動の時に自分の知識や技術が役に立っていると思いますか？
  - 4) 学校でボランティア活動を行うことは自分のためになっていると感じますか？
  - 5) 学校でのボランティア活動で児童に教えることはやりがいになっていますか？
  - 6) 学校のボランティア活動を行うことで社会とのつながりを感じますか？
  - 7) 学校でのボランティア活動を他の人にも薦めますか？
  - 8) 学校のボランティア活動を行うことで自分が必要とされていると思いますか？
  - 9) 学校でのボランティア活動を通じて児童に教えたいことや伝えたいことがありますか？
  - 10) 学校でボランティア活動を行うことに負担感がありますか？
  - 11) 学校でのボランティア活動を始めてから，他のボランティアとつながりが出来ましたか？
  - 12) 学校でのボランティア活動を今後も続けたいと思いますか？
  - 13) 学校で児童と関わる中で自分の知識を役立ててもらいたいと思いますか？
  - 14) 学校でのボランティア活動を通して，児童のために自分がもっと何か頑張ろうと思ったことはありましたか？
  - 15) 学校でボランティア活動を行うことが生活に

充実感をもたらしますか？

3. 自由記述欄は「学校での支援ボランティアについて感じていること考えていること等，何でも率直にお書きください」とした。

## 付記

本研究は私立大学研究ブランディング事業「認知症予防推進プログラム」の助成を受けて，調査，視察，分析を行った。また，質問紙調査の実施に当たっては，佐賀市教育委員会，佐賀市小学校校長会，佐賀市中学校校長会，佐賀市立の全小学校，佐賀市立の全中学校，及び佐賀私立幼稚園連合会，佐賀市内の全幼稚園，佐賀市内の全認定こども園，並びに佐賀市内小学校でボランティア活動実践者の方々にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 牧迫飛雄馬 (2017) 認知症予防における理学療法 理学療法学第44巻, No. 1, pp. 42-46
- 2) 一宮洋介 (2008) 認知症予防は何をしたらよいのか 順天堂医学, 54, pp. 508-510
- 3) 清原裕 (2016) 我が国における認知症の実態と予防－久山町研究からのメッセージ－ 日本医療・病院管理学会誌, Vol. 53, No. 2, pp. 51-64
- 4) 文部科学省 (2015) これからの時代における学校と地域との連携・協働をいっそう推進するための方策(提言) 第2回学校地域協働部会合同会議資料  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/attach/1361630.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/attach/1361630.htm) (最終閲覧日2019/12/23)
- 5) 松田恵示 (2016) 「遊び」から考える体育の学習指導 創文企画
- 6) 新村出編 (2018) 広辞苑 岩波書店
- 7) 貝塚茂樹・藤野岩友・小野忍編 (1993) 角川漢和中辞典 角川書店
- 8) 澤岡詩野 (2017) 「いわゆる」社会貢献活動する意思を持たない高齢者の特徴 内閣府平成28年高齢者の経済・生活環境に関する意識調査 pp. 88-94
- 9) 三ツ石泰大, 角田憲治, 甲斐裕子, 北濃成樹, 辻大士, 尹之恩, 尹智暎, 金泰浩, 大藏倫博

- (2013) 地域在住女性高齢者の運動指導ボランティアとしての活動が身体機能と認知機能に与える影響 体力科学第62巻第1号 pp. 79-86
- 10) 島貫秀樹, 本田春彦, 伊藤常久, 河西敏幸, 高戸仁郎, 坂本譲, 犬塚剛, 伊藤弓月, 荒山直子, 植木章三, 芳賀博 (2007) 地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLとの関係 日本公衛誌第54巻第11号 pp. 749-759
- 11) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二 (2005) ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響－地域保健福祉における高齢者のボランティアの意義－ 日本公衛誌 第52巻 第4号 pp. 293-307
- 12) 糸井和佳, 亀井智子, 田高悦子, 梶井文子, 山本由子, 廣瀬清人, 菊田文夫 (2012) 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果－文献レビュー－ 日本地域看護学会誌 Vol, 15, No, 1, pp. 33-43
- 13) Sakurai R, Ishii K, Sakuma N, Yasunaga M, Suzuki H, Murayama Y, Nishi M, Uchida H, Shinkai S, Fujiwara Y (2018) Preventive effects of an inter-generational program on age-related hippocampal atrophy in older adults: The REPRITS study Int J Geriatr Psychiatry 33 (2) pp 264-272

### 参考文献

- 1) *Concise Oxford Thesaurus, Second Edition* Oxford University Press, 2002
- 2) *Concise Oxford English Dictionary, Eleventh Edition* Oxford University Press, 2004
- 3) *Oxford Advanced Learner's Dictionary, Seventh Edition* Oxford University Press, 2005